

## 日英語比較対照

### ——主語・動詞をめぐる——

小 川 洋 通

#### 1. 主語

##### 1. 1 自称詞・対称詞

日本語では、会話のやり取りにおいて、相手を示す対称詞と、自分を示す自称詞が一般に省略される。聞き手と話し手の存在は文脈上明らかだからである。対応する英語では、それぞれ you, I として、明示される。

(1) で、どうする今日は？ まっすぐ僕の家へ来るか。

What are your plans for today? Can you come directly to the house?

大阪に用があるんだけど・・・

I have business in Osaka,……

もちろん、日本語で対称詞や自称詞が示される場合もある。

(2) 君、昼飯は済んでいるのか。

僕は日本人だからなあ。

日本語における対称詞や自称詞の多様さは、次のようである。対応する英語においては、このような多様さに煩わされることはない。

(3) 対称詞： きみ、おまえ、あなた、せんせい、かちょう、おたく、おじさん・・・

自称詞： ぼく、わたし、おれ、おかあさん、えみ・・・

日本語においては、対称詞を自指的にも用いる頻度が高いのが特徴である。これは話し手と聞き手の共感や一体感を示すものである。<sup>注1)</sup>

文脈上明らかであるものには旧情報がある。日本語では、先行文に主語が表されていれば、後行文では、同一指示の主語や目的語が省略される。それはすでに旧の情報となっているからである。

(4) 彼は若かったが、一家を支えていた。

Though he was young, he supported his family.

ジョンが来たので、会いに行きました。

Because John came, I went to see him.

## 1. 2 親身の (paternal) 複数

英語においては、親が子供に、教師が生徒に、医者が患者に対して用いる言い方で、両者が同等・一体であろうとすることを示す複数の用法がある。これは、包含の *we* (*inclusive we*) と呼ばれるもので、話し手が聞き手に対して思いやりを示すものである。

(5) きょうはどうかな。

How are we feeling today?

あのプロジェクトを見てみようじゃないか。

Now then, let's have a look at that project, shall we?

## 1. 3 社会的 (social) ダイクシス

これは、お互いの対人関係によって生じてくるものであり、話し手のなわばりに属するのかわいかや、親疎関係、ウチとソトの関係を表わすものであり、T と V の区別や、敬称、ていねい表現全体が関わってくる。<sup>注2)</sup> 次の子供の例では、前者がウチの人に対して、後者が、ソトの人に対して用いる。

(6) Mommy / My mommy is out.

## 1. 4 感情的な (emotional) ダイクシス

お互いの親密さや一体感の感情をかもし出す働きをするものがある。次の例では、自動車整備工が車の持ち主 (男性) に向かって用いる場合などに認めることが出来るもので、ここでは *that* が、*your* の代わりに用いられ、話し手と聞き手の間の親密感をあらわしている。

(7) 左側の前輪のタイヤ、だいぶいかれてるよ。

That left front tire is pretty worn.

さらに次のような相手の病気や怪我などについてたずねる場合、*that* が *your* のかわりに用いられて、同情の念をかもし出す効果を持っているという。

(8) 喉の具合はどう。

How's that throat?

## 1. 5 総称 (generic) 用法

特定の人称を示さずに、人称を超えたもっと一般的な人をさす用法である。人称代名詞の *we*, *you*, *they* や不定代名詞の *one* などがある。

*We* は、総括的、全般的な表現で、人間全体、国民全体を話題にする。

(9) 去年は雪が多かった。

We had much snow last year.

You は、直接相手に訴える言い方で、親しみの感情のこもった主観的なものである。

(10) 世の中は良いこと尽くめにはいかぬ。

You can't eat your cake and have it, too.

これに関して、さらに次に示すような例がある。<sup>注3)</sup>

(11) どうして期待できませんか。

How can you expect……?

・・・という印象を受けた。

You felt that……

せまい横丁を入れてゆくと・・・

You turned down a narrow alley……

そこが問題の区域だった。

You found yourself in the district.

普通のアルバイトの子ってそういう工夫をしないのよ。

Your typical part-timer wouldn't make the extra effort.

・・・どう？ 男ってそんなものよ。

What do you think about that? That's men for you.

They は、話し手、聞き手を除外した言い方で、客観的で冷静な述べ方である

(12) ニュージーランドでは何語が話されていますか。

What language do they speak in New Zealand ?

One は、話者を含めた一般の人をさす。意味の上からは we, you, they と同じである。One は文語調であるので、それに代わって a man (person) や we, you がしばしば用いられる。

(13) 自分の財力について話すことはいつも気をつけなければいけない。

One should always be careful in talking about one's (or his) finances.

## 1. 6 無生物主語

無生物主語構文というのは、主語として本来生物をとる動詞が、無生物をとる場合を言う。構文の特徴としては、動詞として他動詞をとることが上げられる。このばあい、原因や理由、契機などを示す主語が、ある結果を引き起こすことを表しており、英語に典型的な「行為者+行為+目標」(S + V + O) の文型をとることが多い。これは行為者が無生物にまで拡大したものであり、無生物の擬人化による比喩表現である。

(14) それだから大阪弁がうまいわけだよ。

That explains why his Osaka accent is so good.

この本を読めばカナダの生活がよく分かるようになる。

This book will give you a good idea of life in Canada.

悪天候のため、出発できなかった。

Bad weather prevented me from starting.

英語の無生物主語は、対応する日本語では副詞的にとらえており、人間が主語になるように表現している。したがって、次の例に見られるように、日本語ではしばしば受動形で表現される。

(15) 彼は優しいので皆に慕われた。

His kindness of heart endeared him to all.

英語では主語として無生物を表わす名詞語句が用いられるのに対して、対応する日本語では、それに関わる動詞表現として副詞的に表現されている。これはまた英米人と日本人の発想の違いを示すものでもある。前者は、名詞によって固体化する客観的対象把握に力点が置かれ、あくまでも行為者を中心とする表現である。後者は、動詞によって状況的に捉える主観的対象把握が主で、場面を中心とする自然発生的表現である。

英語は、自我を主張し、主・客を明確に区別し、自・他の対立を際立たせる。日本語は、自我を抑え主・客を明確にせず、自・他の対立を希薄にし、融合させる傾向が強い。

これはまた、他動詞を用いる「する」表現と、自動詞による「なる」表現の違いでもある。<sup>注4)</sup>

### 1. 7 旧情報・新情報 (old・new information)

旧情報とは、談話の中で聞き手にとって、すでによく知られているか、予測可能な情報である。新情報とは、談話の中で聞き手にとって未知の、予測できない情報である。

旧情報は、先行文脈においてすでに言及されている、前方照応的 (anaphoric) なものであること、発話の場面に直接関与する直示的 (deictic) な事柄、話し手聞き手が同じ場でともに経験したり知覚したりしていること、個々のメンバーでなく、範疇全体を総称する事柄などに関連している。

旧情報は、音声的には、強制がおかれず、文法的には、指示表現、代用表現、省略、繰り返しなどの手段を用いて表わされる。新情報は、強勢を伴い、省略されずに、完全な形で表わされるのが特徴である。

旧情報・新情報は、日本語における「は」・「が」にそれぞれ対応している。前者は、「主題」を表わし、後者は、「叙述」を表わす。<sup>注5)</sup>

(16) 太郎は走っている。<sup>注6)</sup>

Speaking of Taro, he is now running.

太郎が走っている。

Taro is now running.

旧情報・新情報は、英語においてまた定冠詞・不定冠詞がそれぞれ対応している。日本語では、上に見たように、それぞれ「は」・「が」が対応している。

(17) むかしむかしあるところに、おじいさんとおばあさんが住んでいました。

Once upon a time there lived an old man and an old woman.

おじいさんは山へ柴かりに行きました。おばあさんは川へ洗濯に行きました。

The old man went up a hill to gather firewood, and the old woman went to a river to wash clothes.

疑問詞は不定なものを示すので、「が」とともに用いられる。それは新情報を示すものである。

(18) 誰が行ったのですか。

Who went there?

何がほしいのですか。

What do you want?

人称代名詞は、文字どおり旧情報を示すものであり、英語においてそれらは、前方照応的に繰り返し表現される。しかし対応する日本語においては、一般にそれらを繰り返すことはしない。

(19) 彼女は両手をひざに置いてすわった。

She sat with her hands in her lap.

## 1. 8 主題 (theme)

主題は、旧情報であり、またそれは前提 (presupposition) でもある。主題は題述 (rheme) に対応し、また焦点 (focus) に対応している。次の例文において、“象は” は、主題であり、“鼻が長い” は、題述である。対応する英語では、一般に have 動詞を用いて表わされる。一方が話題優越型言語 (topic-prominent language) であり、他方が主語優越型言語 (subject-prominent language) である。<sup>注7)</sup>

(20) 象は鼻が長い。

Elephants have long trunks.

人や物の属性を表わすのに用いられるこのような用法には、さらに次のようなものがある。

(21) スミスは目が青い。

Smith has blue eyes.

あの家は屋根が黒い。

That house has a black roof.

## 2. 動詞

### 2. 1 「する」表現・「なる」表現

英語においては、行為者＋行為＋目標の型が最も好まれる。この場合、行為者である動作主は行為ないし動作を引き起こすものとして、意志を持った責任のある、際立った地位を与えられている。それに対して、日本語では行為者である動作主の特性をむしろ弱めて、希薄にしようとする傾向がある。そこでは、自分たちの意志を越えた何かによってそのような事態に至ったということが意味されている。

前者では、主体性を明確にし、原因とその結果を明確にする他動表現を用いる。後者では、事態がどうなったかという結果に焦点を当てた自動表現を用いる。一方が「する」表現であり、他方が「なる」表現である。

(22) このたびイギリスへ留学することになりました。

I have decided to study in England next year.

それはエネルギーになるんだ。

It gave him energy.

「なる」は、次に見るように、受身の意味を含んでいる。<sup>注8)</sup>

(23) 私たち、6月に結婚することになりました。

We are going to get married in June.

太郎は花子の世話になった。

Taro was helped in many ways by Hanako.

一般に英語では、受動表現になるのに対して、対応する日本語では、自動詞表現となるものがある。英語では、その背後に動作主を想定するからである。その動作主がはっきりしない場合は、受動形になるわけである。

(24) 太郎は戦争で死んだ。

Taro was killed in the war.

壁に立てかけて並べてある。

They had been stood up in a line against the wall.

これには、さらに感情、心理状態などを表わすもの、出生、病気、位置、状態などを示すものがある。

(25) 驚く、喜ぶ、困る。

be surprised, be pleased, be annoyed.

生まれる、病気になる、位置している、従事している。

be born, be taken ill, be situated, be engaged.

英語ではまた、文末重点 (end-weight) の原則により、自動詞表現が避けられるという。<sup>注9)</sup>

(26) He rested. → He took a rest.

The man shouted. → The man gave a shout.

I thought about the solution. → I had a think about the solution.

## 2. 2 Have 言語・Be 言語

所有の表現に関しては、所有を表わす特別の語をもっている言語と、存在を表わす語でもって所有を表現する言語がある。前者が「have 言語」であり、後者が「be 言語」である。<sup>注10)</sup>

一方は「する」表現に対応しており、他方は「なる」表現に対応している。

(27) 太郎 (に) は子供が2人いる。

Taro has two children.

ちょっと約束がありますので。

I have an engagement.

この部屋 (に) は窓が2つある。

This room has two windows.

カンヌでは毎年国際映画祭がある。

They have an international film festival in Cannes every year.

## 2. 3 過程・存在

英語では、存在物とかかわる過程を「する」的に、動的な表現にする。日本語では、存在物の有無を「ある」的に、静的な表現にする。<sup>注11)</sup>

(28) なんにでもいい点はあるものだ。

We find good in everything.

あなたはうっかりミスが多すぎる。

You make too many careless mistakes.

英語では、have のほかに、get、find などを用いる表現が多く見られる。

(29) その本は丸善にある。

You can get/find the book at Maruzen's.

日本語では、変化の結果を表す「なる」や、変化の結果もたらされた状態を表す「ている」の表現がある。対応する英語では、状態を表す be 動詞で表現する。この場合、結果を示している。<sup>注12)</sup>

(30) 全部で500円になる。

It is five hundred yen in all.

彼はアメリカに行っている。

He is in the U.S.

そして誰もいなくなった。

And then there were none.

## 2. 4 「ある」・「いる」

日本語では、文法的に生物と無生物を区別して扱う。生物に対して「いる」を用い、無生物に対して「ある」を用いる。英語ではそのような区別をしない。

(31) 教室に生徒がいる。

There is a pupil in the classroom.

役人も一かたまりいた。

There was a little group of officials.

(32) 机の上に本がある。

There is a book on the desk.

ここにはホテルありますか。

Is there a hotel here?

なお、生物に対して「ある」を用いることがある。その場合は、漠然と有無を問題にするだけの表現であるとされる。たとえば、“兄弟が3人ある”は、あるかないかが示されたに過ぎず、その否定は“兄弟がない”である。それに対して、“兄弟が3人いる”は、具体的なある場所、たとえば彼の家にいることを示す。その否定は“兄弟はいない”となる。

## 2. 5 時制

日本語における「た」は、一般に過去を示すものである。しかしながら「た」には、次のような用法がある。英語では現在形が対応している。<sup>注13)</sup>

(33) まったく疲れた。

I am dead tired.

それは非常に気に入った。

I am immensely pleased with it.

わかった。

I see.

なんだ、そこにいたの。

Oh, there you are.

バスが来た。

Here comes the bus.

「た」にはまた、視点の移動が生じ、移動した時点から見る完了態の用法がある。

日本語では時制が話し手の意識によって支配される主観的な性格が強く、主観的な視点と客観的な視点が混ざり合うことがある。それに対して、英語では時制が、現実の流れに対して、統一的に、客観的に対応しており、一般に視点が混ざり合うことはない。

(34) 明日来た人にこれを渡してください。

Please hand this to a person who is coming here tomorrow.

日本にいったとき、その字引を買います。

I'll buy the dictionary after I get to Japan.

視点の移動ということでは、過去の物語の中に現在形が紛れ込むという現象がある。過去の事実を単に過去として客観的に述べるのではなく、事件のあった時点に視点を移動して、目の前に起こっているかのように捉えるのである。直接体験として、読者を作中の出来事の現場に引きずりこみ、登場人物との一体感、共感性を高め、臨場感をもたらすのである。対応する英語では、過去の表現で統一されている。<sup>注14)</sup>

(35) ブンガ・チナの大きな木が一面に大輪の白い花を付け、雨後のせいで強く匂っているのを見上げていた。

その花の匂いだけでなく、どの木も草も匂っている。土も匂っている。

They looked at a huge Chinese tree covered with large white flowers, heavily fragrant after the rain.

Not only the flowers were fragrant—every tree and blade of grass had its odor, and the earth too.

英語においても、上に見たような視点の混合が見られることがある。いわゆる歴史的現在ないし劇的現在 (historic or dramatic present) の用法である。

(36) 彼女が門のそばを歩いたときには庭の甘くけだるい香りが漂っていた。彼女は今、もうひとつの門、ファートリィ・グロウヴに通じる門にいる。彼女が森の中に入るとそこはすでに夕暮れだ。

The sweet languid odours of the garden had floated past as she walked by the gate. She is at another gate now—that leading into Firtree Grove. She enters the wood, where it is already twilight.

## 注

- 1) 自称詞 (terms for self), 対称詞 (address terms) を扱ったものに, 鈴木 (1973) がある。
- 2) 小川 (2002) 参照。
- 3) 榎垣 (1975), 卷下 (1997) を参照。
- 4) 小川 (1969, 1989) 等を参照。
- 5) 「は」には, 強勢のある「対照」もある。「が」には, さらに今話題になっている人たちの中での意味の「総記」がある。小川 (1974) を参照。
- 6) この場合, 聞き手が太郎を知っているか, この人物がすでに会話に登場していることが必要である。久野 (1973) を参照。
- 7) 日本語の主語を捉えたものに, 『言語』(2004) がある。
- 8) 牧野 (1978) を参照。
- 9) たとえば Quirk (1985: 18.43) を参照。
- 10) 『言語』(2003) を参照。
- 11) 吉川 (1995)。
- 12) 影山 (1996)。
- 13) さらに工藤 (2004) を参照。
- 14) 牧野 (1978)。

## 参考文献

- 荒木 一雄 (編). 1984. 『英文法用例辞典』東京: 研究社.
- 安井 稔 (編). 1992. 『現代英文法辞典』東京: 三省堂.
- 安藤 貞雄. 1986. 『英語の論理・日本語の論理』東京: 大修館.
- 別宮 貞徳. 1983. 『英文の翻訳』スタンダード英語講座 第1巻. 東京: 大修館.
- 市川繁治郎 (編). 1995. 『新編英和活用大辞典』東京: 研究社.
- 池上 嘉彦. 1981. 『「する」と「なる」の言語学』東京: 大修館.
- 2000. 『「日本語論」への招待』東京: 講談社.
- 石橋幸太郎 (編). 1973. 『現代英語学辞典』東京: 成美堂.
- 影山 太郎. 1996. 『動詞意味論』日英語対照研究シリーズ 第5巻. 東京: くろしお出版.
- 神尾 昭雄. 1990. 『情報のなわ張り理論』東京: 大修館.
- 加藤 重広. 2001. 『日本語学のしくみ』シリーズ・日本語のしくみを探る 第4巻.  
東京: 研究社.
- 小島 義郎. 1988. 『日本語の意味 英語の意味』東京: 南雲堂.
- 工藤真由美. 2004. 「現代語のテンス・アスペクト」『文法 II』朝倉日本語講座 第6巻. 東京: 朝倉書店.
- 國廣 哲彌 他. 1978. 『日英語の比較』現代の英語教育 第8巻. 東京: 研究社.
- (編). 1982. 『発想と表現』日英語比較講座 第4巻. 東京: 大修館.
- (編). 1982. 『文化と社会』日英語比較講座 第5巻. 東京: 大修館.
- 久野 暉. 1973. 『日本文法研究』東京: 大修館.
- 1978. 『談話の文法』東京: 大修館.
- 牧野 成一. 1978. 『ことばと空間』東京: 東海大学出版会.

- 巻下吉夫・瀬戸賢一. 1997. 『文化と発想とレトリック』日英語比較選書 第1巻. 東京: 研究社.
- 松田徳一郎 (編). 1999. 『リーダーズ英和辞典』東京: 研究社.
- 松浪 有 他 (編). 1983. 『大修館英語学事典』東京: 大修館.
- 水谷 信子. 1985. 『日英比較 話しことばの文法』東京: くろしお出版.
- 野田 尚史. 1996. 『「は」と「が」』新日本語文法選書 第1巻. 東京: くろしお出版.
- 小川 洋通. 1969. 「無生物主語とはなにか」『英語学』第3号. 東京: 開拓者.
- 1974. 「新しい情報と古い情報」『富山大学教育学部紀要』第22号.
- 1989. 「無生物主語の文」『話題源英語』東京: 東京法令出版.
- 2002. 「発話者・解読者・脈絡」『富山大学人文学部紀要』第36号.
- 尾上 圭介 (編). 2004. 『文法 II』朝倉日本語講座 第6巻. 東京: 朝倉書店.
- 大塚 高信・中島 文雄 (監). 1982. 『新英語学辞典』東京: 研究社.
- Quirk Randolph, Sidney Greenbaum, G. N. Leech & Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Harlow: Longman.
- Seidensticker E. G. 安西徹雄. 1983. 『日本文の翻訳』スタンダード英語講座 第2巻.  
東京: 大修館.
- 那須 聖. 1962. 『日本語らしい表現から英語らしい表現へ』東京: 培風館.
- 鈴木 孝夫. 1973. 『ことばと文化』東京: 岩波新書.
- 竹林 滋 (編). 2002. 『研究社新英和大辞典』東京: 研究社.
- 寺沢 芳雄 (編). 2002. 『英語学要語辞典』東京: 研究社.
- 楳垣 実. 1975. 『日英比較表現論』東京: 大修館.
- 柳父 章. 1979. 『比較日本語論』東京: 日本翻訳家養成センター.
- 安井 稔 (編). 1987. 『例解現代英文法事典』東京: 大修館.
- (編). 1996. 『コンサイス英文法辞典』東京: 三省堂.
- 1996. 『英文法総覧』改訂版. 東京: 開拓社.
- 吉川千鶴子. 1995. 『日英比較 動詞の文法』東京: くろしお出版.
- 『言語』2003. 「「もつ」と「ある」の言語学」第32巻, 第11号. 東京: 大修館.
- 2004. 「日本語の主語を捉える」第33巻, 第2号. 東京: 大修館.